10 月第 4 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 10 月 22 日（日）10：30－11：30　聖霊降臨節第 22 主日
■説　教：　保科けい子牧師
■説教題：「　福音を告げ知らせ　」
■聖　書　新約：ローマの信徒への手紙 1 章 8～15 節（新約 p273）
■讃美歌：113「　いかに幸いな人。」
　　457「　神はわが力、わが強き砦、」

昨日10月21日（土）の夕方、アメリカやエジプトの複数のメディアが、現地時間の21日午前10時半ごろ(日本時間の午後4時半ごろ)、ガザ地区とエジプトとの境界にあるラファ検問所が開放され、人道支援物資を載せたトラックがガザ地区に入ったと伝えた、というニュースを見ました。しかし、10月7日（土）の朝に始まったパレスチナ自治区ガザを実質的に支配しているパレスチナのイスラム組織ハマスによるイスラエル攻撃に始まった戦闘は、周辺国や世界の国々を巻き込んで、本日も混乱状態にあるようで収束する気配はありません。今この時も、多くの人々の命が失われていくことを思うと、主なる神様の介入が速やかにあるようにと祈らずにはいられません。

ところで、先週の火曜日10月17日に、私は茨城県の水戸市に30年ぶりで帰省し、高校の時のクラス会に出席しました。高２高３と２年間同じクラスで、担任の先生が持ち上がりでした。その先生は世界史を教えてくださいました。そして、何よりも、私自身が置かれていた狭い世界から、世界史を通して歴史をしっかりと見つめつつ、時代や地域を超えた広い世界へ目を開くことの大切さを教えていただいたような気がします。たぶん、高校卒業後50数年、数年ごとにクラス会を続けて来られたのは、友人たちもまた、同じような思いでいるからかもしれません。ですから、高校を卒業後も山川出版社の『詳説世界史』という教科書の版が新しくなる度に購入してきました。最近の手持ちのものは、2019年9月15日版の英語版です。久しぶりに開いて宗教改革の箇所を見ましたら、相変わらず「贖宥状の販売」の挿絵がありました。「『お金が箱のなかに投げ入れられる音とともに、魂は救われる』と説教師は宣伝して利益を得た。」と説明されています。1517年10月31日にヴィッテンベルクの城教会の扉に９５箇条の論題を貼りつけたマルティン・ルターの行動の中心には、そのように当時のカトリック教会が陥っていた様々な腐敗や堕落に抗議するということがありました。この宗教改革については、来週の主日礼拝において丁寧に見ていきたいと思います。そして、このクラス会に出席していた中の一人が、私が19歳の時の５月の連休に帰省した時の日曜日に、友人に誘われてキリスト教の礼拝に初めて出席した教会の現在のメンバーであることを知りました。その頃は大学のチャペルを使用して礼拝をしていましたが、現在は街中に移ったとのことです。55

名の級友の中でおそらく彼女と私の二人だと思いますが、同じ福音を聞いている友がいることを感謝しながら帰ってきました。

さて、本日の聖書箇所にまいりましょう。先週と同じく、ローマの信徒への手紙1章8節から15節をご一緒に見てまいりましょう。ローマの信徒への手紙の著者パウロは、ローマの教会の人々のことを祈りにおいて想い起こすことによって、10節にあるように「何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように」という願いを強められました。ローマへ行って同じ信仰を持つあなたがたに会いたい、それがパウロに与えられた真剣な祈りだったのです。この願いが神のみ心によって実現することによって、11節、12節で「11 あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。12 あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。」と記されているような、信仰を持つ者同士の信頼関係が作られていくということをパウロは確信しているのです。このことは、現在の私たちの間でも大切なことだと思います。私たちが主の日ごとに教会に集うのは、主なる神様が礼拝にお招きくださるからというのは言うまでもありません。そして、同じように集ってきた友人たちと「互いに持っている信仰によって、励まし合」うこともまた、大きな恵みであるのです。

13節にまいりましょう。「ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも」とあります。パウロは、地中海沿岸の多くの地域や町において、異邦人たちにキリストの福音を宣べ伝えてきました。「異邦人」というのは、もともとは、ユダヤ人たちが自分たちは神様から選ばれている特別の民であると自認して、ユダヤ人でない人のことを軽視して呼んでいた言葉です。自分たちだけが神に選ばれて救いにあずかる神の民であり、自分たち以外の民族はひとまとめにして「異邦人」と呼び、神の恵みの外にいる人々と考えていたのです。パウロ自身もかつては、由緒正しいユダヤ人であるとその出自を誇りに思っていたのでした。しかし、ダマスコ途上での復活の主イエス・キリストとの出会いによって、彼は、旧約聖書以来の神の救いが、主イエス・キリストの十字架の死と復活によって、ユダヤ人のみでなく全ての民につまり異邦人にも及んでいること、そして、神が異邦人をも救いへと招いて下さっていることを知らされました。ですから、1章の5節には、「すべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました」と記し、異邦人に福音を告げ知らせる使命を帯びた使徒として自分は立てられたといっているのです。彼の伝道によって、様々な地域の多くの異邦人たちがキリストを信じるようになりました。その同じ実りをローマにおいても得たいと彼は願っているのです。13節には「ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで」と続いています。彼が得たいと望んでいる実りとは、キリストの福音を信じて神の救いにあずかる人が興されることです。そのようにして、キリスト

教は、世界中にその福音を宣べ伝え続けてきました。14節15節では、「14 わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15 それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。」とパウロ自身が主から与えられた使命を語っています。当時の国際語はギリシア語でした。ですから、新約聖書もギリシア語で書かれています。そのことを考えると、「ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも」とは、当時の世界の全ての人々にぜひ福音を告げ知らせたいと述べていることになるのです。主なる神は、私たちが特に心にかけて思い起こす人々、まだキリストを知らず信じていない人々、あるいはキリスト教に関心を持たない人々、さらにはキリストに対する信仰に否定的な思いを抱いている人々のためにも、御子イエス・キリストを遣わして下さったのです。そして、ここにいる私たちもみな、異邦人と呼ばれる存在です。以前の私たちは、遠い中東のイスラエルという国そのものをほとんど知らない者だったのではないでしょうか。しかし、2000年も前に、一人の伝道者が福音を全世界に告げ知らせたい、と願ったことから出来事が始まりました。それは、世界の中心のローマに集っている主イエスを信じている人々へ、あらかじめ自分自身の信じている福音の確信を手紙で知らせておきたいという思いを、使徒パウロが主なる神様から与えられたところから形になっていったのです。私たちもまた、その救いの出来事をしっかりと受け止め、それを告げ知らせる者へと変えられていきたいと思います。